

# 台湾における日本イメージ形成

## — 家庭環境、大衆文化及び歴史教育を焦点として —

守谷智美・加賀美常美代・楊孟勳

### 1. 問題の所在と研究目的

近年、グローバル化の進行に伴い、文化や人の越境的な流動が活発化している。日本と台湾の間でも相互の関心が高まるとともに、ビジネス・留学・観光等を通じた交流が益々盛んになりつつある。

このような中で、日台間の相互の親近感も高まりを見せている。台北駐日経済文化代表処（2009）による近年の調査結果では、台湾に対して「親近感を感じる」と答えた日本人対象者は過半数を占めていた。また、交流協会（2010）による対日世論調査の結果でも、「最も好きな国（地域）」として「日本」を挙げる台湾人対象者が過半数を占め第1位となっており、「日本に親しみを感じる」との回答も6割を超えていた。

このことはまた、近年の台湾における日本語学習状況にも少なからず反映されていると見られる。台湾における日本語学習者数は2006年時点で19万人超と過去最高となっており、総人口に占める日本語学習者の割合は世界最高水準である（交流協会、2007）。また、来日する留学生の中で台湾出身者は2009年時点で5300人超と中国・韓国に次いで第3位を占め、増加の一途を辿っている（日本学生支援機構、2009）。

このような日台相互の親近感の高揚の一方で、台湾においては日本への不信感も依然として残る。交流協会による上述の調査（交流協会、2010）では、日本を「信頼できない」とする回答が1割見られ、その主な理由として「過去の歴史的経緯」が挙げられている。この「過去の歴史的経緯」がどのようなことを指すのか、それに関する具体的記述は見られない。しかし、ここには台湾と日本や中国との関係、また政治的立場や個人の状況など、台湾社会がこれまでに経験してきた歴史的経緯の中での様々な論点が含まれていると考えられる。日本統治時代においてはその統治政策の一環として日本語が「国語」として位置づけられ、日本語の使用が推奨された。戦後の国民党統治による戒厳令下では一転して中国への同化政策が図られ、日本語使用が禁止されるなど、日本は政府による批判の対象となった。この過程で台湾社会が経験してきたことを単純化して語ることは不可能だが、少なくとも台湾が背負うこのような複雑な歴史的経緯が台湾における日本イメージに今なお多大な影響を持つことを念頭に置いておかなければならない。

それゆえ、台湾における日本イメージは単純に「親日」「反日」、あるいは「肯定的」「否定的」では割り切れぬ「如何ともしがたさ」（蔡、2006）をはらむのが現状であり、表面的な好意度だけでは説明され得ないことが明白である。こうした複雑な社会的・歴史的背景を持つ台湾出身の学習者と日本において教育の場を通して日々向き合う立場として、以上のような学習者背景を理解することは、異文化間における相互理解や教育支援の上でも重要な意味を持つと言えよう。

台湾における日本イメージについてはこれまでにいくつか研究が行われてきたが、台湾の若い世代を対象とした研究には以下のようなものが見られる。まず、甲斐（1995；1996）はその一連の研究において、台湾人青年層の日本語への意識の解明等を目的とした質問紙調査を行った。その結果、台湾人青年層の日

本語への意識は全体として肯定的であり、そこには日本の大衆文化の影響が見られた（甲斐，1995）。また、祖父母や父母、兄弟などの近親者が日本語を理解するかどうか台湾人青年層の対日本語・日本人・日本観に影響する可能性が示唆された（甲斐，1996）。同様に、台湾の大学生を対象とし、日本および日本語への意識の解明を目的とした篠原（2003）の調査でも、対象者の8割以上が日本に対する好意的なイメージを所持していることが示され、その背景に台湾における日本の漫画やアニメ等の大衆文化の影響があることが窺えた。また、対象者の過半数の家庭内に日本語話者がいることから、日本語が聞ける環境で育つことが肯定的な日本イメージの形成に結びつく可能性が指摘されている。

これらの研究は台湾の大学生の世代を中心としたものであったが、加賀美・守谷・楊・堀切（2009）は発達段階別の日本イメージを解明するため、台湾の小・中・高・大学生計475名を対象とし、九分割統合描画法による日本イメージの描画の収集とその内容の分析を行った。その結果、対象者によって描かれた4043例の描画は、多い順に「観光」「大衆文化」等、計13のカテゴリーに分類された。これらをさらにイメージ別に分類したところ、結果として肯定・中立イメージが同程度に多く、合わせて9割を越え、否定イメージは僅少であった。この傾向は小学生から認められ、しかも時系列的に大きな変化が見られなかったことから、台湾においては既に小学生の段階から日本に対するイメージが形成され安定化していることが明らかとなった。

このような様相を持つ台湾の日本イメージの背景となる要因を探るべく、守谷・楊・加賀美（2009）は関連文献による研究を行った。その結果、台湾における日本イメージが激動の時代背景の中で変容を遂げてきたこと、また台湾の家庭環境や日常的な日本の大衆文化との接触が日本イメージ形成に大きく関与する可能性が指摘されている。

以上のように、これまでの研究結果から、台湾の若者が抱く日本イメージの形成には家庭環境及び日本の大衆文化が形成要因として重要な役割を担っていることが共通して示される。しかし、これらの要因が日本イメージの形成にどのように関わっているのかについてはこれまでに明らかにされていない。台湾における日本の大衆文化との接触と日本イメージ形成との関連についてはこれまでも複数の研究で指摘されている。例えば、日本の人気俳優らが出演するドラマの視聴が都会的・先進的な日本イメージの形成に結びつくことなどである（岩淵，2001；李，2006など）。しかし、実証的な調査に基づく解明はまだ十分であるとは言えない。

また、ある社会における日本イメージの背景要因を検討する際、歴史教育の影響についても考慮する必要がある。岩井・朴・加賀美・守谷（2008）は韓国における日本イメージに関する文献研究を行い、韓国における戦争、侵略等の日本イメージには学校教育を中心とした歴史教育の影響が多であることを指摘している。本研究においても、この歴史教育の点を考慮に入れることが肝要であろう。

そのため、本研究では、台湾の20代および30代の若い世代を対象とし、家庭環境や日本の大衆文化との接触及び学校教育を中心とした歴史教育の影響が対象者の日本イメージ形成にどのように関与しているのかを質的に検討することを目的とする。

## 2. 研究方法

2009年7月から9月にかけて、東京とその近郊に居住する20代および30代の台湾出身男女9名（20代5名、30代4名）を対象としインタビュー調査を行った。調査対象者の属性は表1のとおりである。

表1 対象者の属性

対象者	年齢	性別	専攻	日本居住期間	立場、滞在目的
A	20代前半	女性	日本語	1年3ヶ月	留学生
B	20代前半	女性	日本語	1年3ヶ月	留学生
C	20代前半	女性	日本語	4ヶ月	留学生
D	20代後半	男性	英語、日本語	4年	留学生
E	20代前半	男性	国際経済	4年3ヶ月	留学生
F	30代前半	男性	情報工学	11年	社会人
G	30代後半	女性	社会学	4年3ヶ月	社会人 (日本人配偶者との結婚)
H	30代前半	女性	日本語	10年	社会人
I	30代前半	女性	日本語	3年7ヶ月	留学生

インタビューに当たり、加賀美他（2009）、守谷他（2009）等を参考に共同研究者3名で検討を行い、質問項目を作成した。質問項目は、家庭での日本語使用状況、日本の大衆文化との関わり、学校における歴史教育の状況等、計8カテゴリーから構成される。

インタビューは、対象者9名に対し1対1の形式で行い、共同研究者3名がこれを分担した。ここでは、対象者の状況に柔軟に対応できることを重視するため、半構造化面接の手法を採用した。一人当たりのインタビュー実施時間は40分から1時間程度である。対象者9名の属性は上記のとおりである。対象者の日本での居住期間はインタビュー時点で延べ4ヶ月から11年までとばらつきが見られたが、居住期間に係わらず全員が高度な日本語力を有していた。インタビューにおいては日本語での回答が困難な場合は母語の使用も可能であったが、実際の使用言語は対象者全員が日本語であった。

インタビュー内容は対象者の許可を得て録音され、これを全て文字化した後、本研究目的と合致する「家庭環境の影響」「日本の大衆文化とのかかわり」「歴史教育の影響」の3点に関わるものを抽出し、本研究の分析対象とした。

データ分析に際しては、KJ法（川喜田,1967）の手法に基づき、内容ごとのまとまりに分けた上でそれぞれラベル付けとカテゴリー化を行った後、さらに上位カテゴリーに分類・整理した。これらのラベル名及びカテゴリーの確定にあたっては、信頼性を得るため共同研究者間の協議の上で決定した。

### 3. 結果と考察

#### 3.1 家庭環境と日本イメージ形成との関連

家庭環境と日本イメージ形成との関連を検討するため、家庭内の日本語使用状況に着目し、家族<sup>1</sup>に日本語話者がいるか、また「いる」場合、家庭内での日本語使用頻度や使用状況はどのようなものであるかという2つの観点を基準とし、データを検討した。これにより、対象者9名の家庭環境における日本語使用状況を、「常時使用型」「散発的使用型」「限定的使用型」「非使用型」の4つのタイプに分類した。以下、表2に詳細を示し、各ケースについて事例を挙げつつ検討する<sup>2</sup>。

まず、家族に日本語話者がおり、家庭内で台湾語と並んで日本語使用が幼少時より頻繁に見られるケー

表2 家庭環境における日本語使用状況

ケースタイプ	家庭環境における日本語使用状況				家庭環境による日本イメージへの影響
	家庭内の日本語話者の存在	家庭内の日本語使用頻度	日本語使用の状況（詳細）	対象者	
常時使用型	いる	頻繁	・祖母 ・会うたびに日本語で話す ・幼少時より日本語を聞いて育った	C	有
散発的使用型		たまに	・祖父・祖母・伯父・伯母 ・単語・単文レベルでの日本語使用が多い ・日本語話者である家族から対象者への日本語使用（対象者は日本語で対応/非対応）	D	有
				E	無
				H	有(*)
限定的使用型	限定的状況下	・祖父・祖母・伯父・母親 ・単語・単文レベルでの日本語使用 ・日本語話者である家族から第三者の日本人への日本語使用 ・家族間の日本語使用は見られない	A	無	
			F	有	
			G	有(*)	
非使用型	いない	—	・家庭内での日本語使用は見られない	B	有

「家庭環境への影響」の(\*)については、本文及び文末注3を参照。

スを「常時使用型」とした（対象者Cが該当）。対象者Cは、小学校6年生まで日本統治下で日本語による教育を受けた祖母と10歳まで同居しており、日常的に祖母の台湾語および日本語を聞いて育った。日本語で「桃太郎」の童謡も聴いていたという。Cが大学入学後、日本語を主専攻としてからは、台湾語と日本語で会話が行われるようになった。Cは「もし、自分が日本語をしゃべれば、おばあちゃんと日本語でしゃべるから、うれしく思ってくれる」と述べ、自身の日本語学習への動機づけとして祖母の存在が大きく関与していることに言及している。このように、常時使用型では、家族による日本語使用が対象者によって肯定的に受け止められ、対象者自身の日本や日本語との関わりにも大きく影響を与えている様子が見られた。

次に、家庭内に日本語話者がいるものの、日本語使用は頻繁ではなく、対象者に対する日本語使用が時折見られる程度であるケースを「散発的使用型」とした（対象者D, E, H, Iが該当）。このケースにおける家庭内の日本語話者とは日本統治下での教育を受けた祖父母や日本語学習経験を持つ伯父・伯母であり、その日本語使用は単語レベルや1文のみに限られるとともに、日常的であると言えるほど頻繁ではない。そのためか、家族の日本語使用に対し対象者が日本語で応答するケース（対象者D, H, I）と応答しないケースが混在していた。例えば、対象者Iは、自身の来日決定の際、祖母が日本語で話しかけて来たことに驚き、これを受け止めた上で自身も日本語で応答したという。一方、対象者Eは、祖父が時折日本語で話しかけてくることに対し、次のように述べる。

おじいちゃんも、日本語、ちょっとできるから、いろいろ通訳の仕事とか、働くの、会社の人の案内とか、日本の案内とか、たまにアルバイトみたいな感じで、もう定年だから、日本語でできるから、そういうことしてるから、(中略) おじいちゃんもたまに、そういう（日本人の友達がいきなり中国

語で話してくるような)日本語を話してくるんですよ。俺、どうやって対応すればいいかなあって、そういう感じです。もし会話があっても。

インタビューの中でIは祖父が日本語を話せることを「よいこと」と評価しつつも、祖父の日本語使用に対し「日本人の友達がいきなり中国語で話してくるような」違和感を覚え、結果として日本語で応じない。このように、「散発的使用型」では、対象者が散発的に見られる家族の日本語使用を必ずしも受容できない複雑さを抱える様子が窺えた。

さらに、家庭内に日本語話者がいるが、その日本語使用が限定的な条件下でのみ見られるケースを「限定的使用型」とした(対象者A, F, Gが該当)。このケースにおける家庭内の日本語話者とは、日本語世代である祖父母や伯父、また対象者自身の母親を指し、日本語話者から第三者の日本人への日本語使用のみが見られることが特徴的である。例えば、対象者Gは日本人の夫と共に帰省した際の祖母の日本語使用を次のように述べている。

昔、結構、小学校のときから日本語教育受けましたので、二人のおばあちゃん、しゃべられます。だんなが来ましたら3人とか4人とかで一緒にしゃべりますけど、(中略)そのとき、私じゃない、だんなに聞いて、いつ来ましたか、とか、何を食べたかとか、日本はどうですかって、そういうみたいの話なんですわね。

Gは、祖母からGの夫への日本語使用は見られるものの、G自身への日本語使用は一切なかったという。同様に対象者Aも日本人の友人を祖父のもとに伴った際、祖父が友人に日本語で話しかけるのを見たが、それ以前に祖父の日本語使用は見られず、Aと祖父との間での日本語使用も一切なかったという。また、対象者Fの場合、母親が日本関連企業に勤務しており高度な日本語力を有し、Fの伯父もまた日本語教育を受けた日本語話者であるが、家庭内での日本語使用は見られなかったという。ただ、幼少時に母親の職場に伴われた際や伯父の日本訪問に同行した際に限り、日本語が使用されるのを見たのだという。このように、「限定的使用型」では、家庭内に日本語話者が存在するものの、台湾人同士での日本語使用は見られないことが共通した特徴であった。

最後に、家庭環境において日本語話者が存在せず、日本語使用が一切見られないケースを「非使用型」とした(対象者Bが該当)。

以上の4つのケースについて、家庭環境が自己の日本イメージ形成に影響を与えたと思うか尋ねたところ、日本語使用状況に係わらず「有」・「無」が混在する結果となった。影響が「有」と答えたケースでは、常時使用型であるCに加え、Dのように家族全員で日本へ旅行したケースや、Fのように日本語教育を受けた世代である伯父たちの礼儀・姿勢の正しさに敬意を感じ、そこから「礼儀正しい日本」のイメージ形成がなされたというケース、家庭内に日本語話者はいなかったが「自分と同じくらい家族の日本イメージは良かった」と述べたBのケース等が見られた。また、影響が「無」と答えたケースでは、家庭内では日本語や日本のことがあまり話題にならなかったというIのケースや、自身の日本語学習開始以降はむしろ自分が家族の日本イメージ形成に影響を与えているかもしれないというAやEの言及も見られた。

これらに加え、家庭環境からの日本イメージ形成への影響は「有」るが、それは日本語話者である祖母や伯母などからではなく、日本語は話せないものの日本に強い関心を持ち日常的に多くの情報獲得や日本

の大衆文化等との接触を図っている自身の父親や母親によるものであるというHやGのようなケースも見られた<sup>3</sup>。例えば、Gは、日本語が話せる祖母たちよりも、日本語は話せないが日本好きの母親から強く影響を受け、家族全員が日本に親しみを感じていると述べている。

以上のことから、本研究では、対象者の家庭環境と日本イメージ形成との関連においては家庭内に日本語話者が存在するかどうか、また家庭内での日本語使用頻度や使用状況がどのようなものであるかが対象者の日本イメージ形成に直結するわけではないことが示された。つまり、家庭内での日本語使用状況に係わらず、家族の成員が日本に対し肯定的な態度を所持し、対象者がその成員と密度の濃い接触を持つ場合、それが対象者自身の日本イメージ形成に深く影響を及ぼす可能性が示唆された。

### 3.2 日本の大衆文化と日本イメージ形成との関連

日本の大衆文化<sup>4</sup>と日本イメージ形成との関連を検討するため対象者に日本の大衆文化への関心の有無を尋ねたところ、全員がこれまでに何らかの関心を持って日本の大衆文化と接触してきたことが明らかとなった。そのため、日本の大衆文化を「誰と」「どのように」楽しんできたのかの2点を基準として分析を行い、対象者の日本の大衆文化の楽しみ方を「主体的享受」と「誘発的享受」の2つに大きく分類した。表3に詳細を示す。

まず、「主体的享受」は、対象者個人の関心に基づいて日本の大衆文化を「単独」で楽しむケースである（対象者9名全員が該当）。ここには、日本ドラマへの関心とその視聴による影響を示す「日本ドラマへの関心」（7例）、日本漫画や漫画家への関心を示す「日本漫画への関心」（5例）、日本アニメへの関心・視聴とその影響を示す「日本アニメへの関心」（3例）が見られ、日本のバラエティ番組やファッション等「その他の日本の大衆文化への関心」（4例）への言及も見られた。

一方、「誘発的享受」は、他者の影響で対象者が日本の大衆文化への関心を生起させたり、他者と共に楽しんだりするケースである。この「他者」には「友人」と「家族」の2つのケースがある。まず、「友人」と楽しむケース（対象者A, B, D, F, G, H）では、子供の頃から友人間で日本の大衆文化が常に話題となり、友人の所有する日本製品から日本を意識してきたという「友人の日本志向による影響」（6例）、友人と共に日本旅行や日本のゲームを楽しんだり、単に趣味を共有するだけでなくそれを通して共有の相手である台湾人・日本人の友人との親交を深めたりしたという「日本の大衆文化を媒介とした友人関係」（4例）が見られた。

また、日本の大衆文化を「家族」と共に楽しむケース（対象者A, C, D, E, F, G, H）では、家庭内での日本の電化製品や伝統品の選択的購入や、家族による日本語・台湾語によるカラオケ等の日本志向、また家族の友人から贈られる日本の玩具に憧れを抱いたなどの「家族の日本志向による影響」（9例）、家族揃っての日本料理店での食事や日本のドラマの視聴、家族間での日本の大衆文化についての会話、家族間で日本の歴史小説への関心等「家族間での関心の共有」（6例）が見られた。

単独での日本の大衆文化享受の様相からは、対象者にとって日本の大衆文化が「ただ楽しむ」だけのものではなく、日本関連情報の獲得のための手段となっていることが窺える。例えば、対象者Aは一日3時間の日本ドラマ視聴を通して「仕事上のことととも、テレビで学んだ」と述べている。同様に対象者Bも、日本の子供アニメ番組の視聴を通して、日本の学校で上履きが使用されることを知り、台湾との差異に気づいたという。このように、対象者にとって日本の大衆文化の享受が日本社会に関わる知識や情報の

獲得にも結びついていったことが示された。

また、友人との日本の大衆文化享受においては、単に友人との間で日本の大衆文化が頻繁に話題に上ったり友人からの影響を受けたりするだけでなく、趣味の共有により親交を深めるなど、日本の大衆文化を通して対象者と友人との関係性が形成・維持されていたことが示された。例えば、対象者Aは中学生のとき日本のアイドルのコンサートがきっかけで知り合った日本人と以後も手紙を交わし、それが日本語学習への関心へと結びついていったと言う。また、対象者Gは、共通の趣味を持つ友人との親交の経験を以下のように述べている。

(専門学校時代) すごく日本を好きな友達、二人すごい仲良くて、彼女、〇〇(日本のアイドル名) 好きなんです。私、△△(別の日本のアイドル名)、好きだった。二人、いつも一緒にて、台湾では日本専門のものを売っているビルがありますね。いつも休みのとき、いっしょに二人そっちに行き、音楽とか、流行ってるものとか買ったりして、アイドルの写真とか、あっちこっち見たりして。

このように、日本の大衆文化享受が友人関係の形成・維持に関わる重要な役割を果たしていたことが明らかである。

さらに、家族との日本の大衆文化享受においては、対象者が家庭内において幼少時から家族との日本の大衆文化享受の中で、多分にその見方の影響を受けてきたことが示された。例えば、対象者Cは幼少時、従姉が日本のドラマや漫画に関心が高く、漫画本も多く所持していたことや、祖母の日本語や日本の話を多く聞いて育ったことから、日本語を主専攻とするに至ったと述べている。また、対象者Iは、家庭内において「パソコンは△△、魔法瓶は\*\*\*(△△、\*\*\*はいずれも日本のメーカー)」との日本製品への評価があったと述べている。さらに、対象者Gは、日本ドラマ好きの母親の影響で兄弟姉妹もまた共通の日本の俳優が好きになり、家族で共に日本ドラマ視聴を楽しんでいたという。

このように、対象者は日本の大衆文化を単独で、また家族や友人と共に享受してきており、それらを通して日本イメージが形成されてきたことが顕著である。例えば、対象者Dは家族に共通した趣味である演歌をカラオケを通して、D自身は参加することはなかったものの、そこから日本語に対するイメージを持つようになったという。

演歌、うちの家族は大好きです。だから、子供の時から、暇、時間があったら家族が集まって演歌を歌ったり。日本語バージョンそのままのやつもあったし、台湾語に訳された日本語の歌を聴いて育ってきました。(家族が歌うのを) 聞いてて、日本語、きれいな発音かなって感じました。

一方で、日本の大衆文化との接触による日本イメージ形成への影響に関して具体的な言及が見られなかった対象者HやIのようなケースもある。これは、幼少時戒厳令下にあり、中学生以降になって日本のテレビ番組が放映されるようになったという社会状況であったため、日本製品は身近にあったものの、それが「日本」を意識することに繋がらなかったのだという。このため、H、Iは日本の大衆文化の享受から日本イメージが形成されにくかったと述べた。

以上のように、本研究では、台湾における対象者の日本の大衆文化との接触と日本イメージ形成との関わりが明らかとなった。そこでは、日本の大衆文化は単に日常的な「趣味、娯楽」というより、日本関連

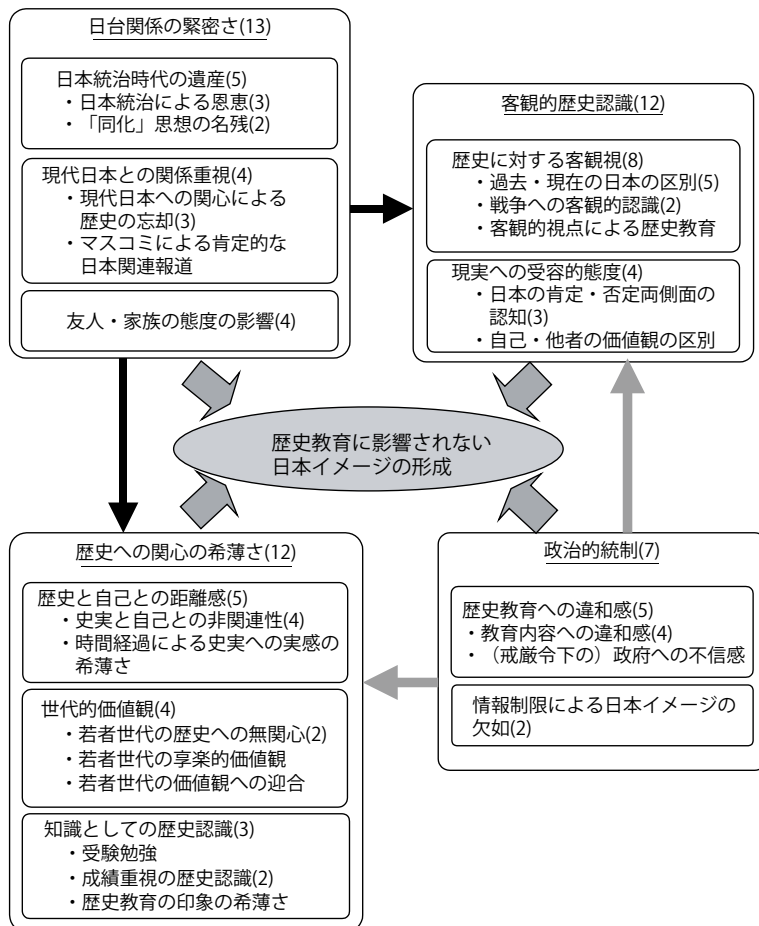
情報の収集や友人との関係性の形成・維持、また家族間での嗜好・娯楽の共有のための媒介機能を果たしており、これらを通して対象者自身の日本イメージが形成されてきた可能性が示唆された。

### 3.3 歴史教育の影響

日本イメージの形成に関わる歴史教育の影響を明らかにするため、学校教育を中心とした歴史教育が自身の日本イメージに影響していると思うかどうかについて対象者に質問を行った。その結果、対象者9名全員が「歴史教育による日本イメージへの影響はない」と述べ、本研究において歴史教育と日本イメージ形成との関連性は認められなかった。

影響を受けなかった理由について対象者が言及した内容を分析したところ、「日台関係の緊密さ」(13例)、「客観的歴史認識」(12例)、「歴史への関心の希薄さ」(12例)、「政治的統制」(7例)の計4つのカテゴリーが抽出された。以下、各カテゴリーの詳細とカテゴリー間の関連を表4に図示する。

図1 歴史教育による影響を受けない理由





まず、「日台関係の緊密さ」(13例)は、過去から現在に至るまでの台湾と日本との間の強い関係性を示すものである。ここには、日本統治時代における日本人による社会的整備や日本語世代が今なお保持する日本との一体感に言及した「日本統治時代の遺産」(5例)、流行を先導する日本への強い関心と台湾のマスコミによる日本関連の肯定的報道の多さ、その一方で戦争に関する歴史が忘れられつつあることに言及した「現代日本との関係重視」(4例)、さらに友人や家族の日本への肯定的態度に影響されているという「友人・家族の態度の影響」(4例)が見られた。

次に、「客観的歴史認識」(12例)は、歴史的事実をより客観的な立場からとらえようとするものである。ここには、現在・過去の日本を区別するとともに、戦争によって起こり得る「非常識な」事態を客観的に認識しようとする態度や、教師による客観的な教育上の視点の重要性を指摘する「歴史に対する客観視」(8例)、政治的立場から価値観の異なる他者との間でもそれに影響されず、物事を肯定・否定の両側面を持つものとしてとらえようとする「現実への受容的態度」(4例)が見られた。

さらに、「歴史への関心の希薄さ」(12例)は、世代的・個人的な歴史への関心の低さを示すものである。ここには、史実と自己とは無関係であり、時間の経過により一層歴史への実感が喪失されているという「歴史と自己との距離感」(5例)、若者世代の歴史への無関心さと、それに迎合し楽しいことのみを追求しようとする享乐的価値観の傾向に言及した「世代的価値観」(4例)、受験勉強や成績のためにのみ歴史を知識として覚えたという「知識としての歴史認識」(3例)が見られた。

最後に、「政治的統制」(7例)は、過去から現在に至る政治の影響による教育内容や情報獲得への規制を示すものである。ここには、中国大陸中心の歴史学習の内容に対して台湾人として抱く違和感とともに、このような教育の提供者である政府への不信感を示す「歴史教育への違和感」(5例)、戒厳令下にあった幼少時、日本関連情報が制限されていたため日本に対する肯定的イメージのみならず否定的イメージさえ持つことはなかったという「情報制限による日本イメージの欠如」(2例)が見られた。

これらのカテゴリーにおいては、カテゴリー間相互の関連性も窺える。例えば、現在の「日台関係の緊密さ」ゆえに、過去を強調するのではなく新たな日台の関係性を見据えていこうとする「客観的歴史認識」の姿勢が、対象者Dの言及から明らかである。

台湾は今、日本ブームで、周りの若者は結構みんな日本のことが好きで、自分もついみんなの方になってしまうじゃないですか。だから、その流行を追いかけている時に、昔のことを、だんだん忘れちゃった感じがする。他の人は分からないが、私は過去のことは\*\*流そう、現在のことは現在のこと、と思っているからです。前の世代がどんな悪いことをやったとしても、じゃあ、今の私はいったい何ができる？ できなかつたら、じゃあどうして今の日本のいいことを受け入れられないの？って思うんです。

また、「日台関係の緊密さ」は「歴史への関心の希薄さ」とも結びつく。対象者Bは、現在の日本の姿に目を奪われ歴史に対して無関心である同世代の価値観を次のように述べている。

過去に日本人が悪いことをしたことをだんだん忘れていってます。今しか見ていないです。あと、自分はその時代の人ではないのでそんなにわからない。やっぱり日本人は悪いことをしたなと思ってですけど、嫌いではないですね。たぶん、周りの人、友達、家族も結構日本のことを好きなので、日本

を批判する人はあまりいなかったの、私も日本のことを嫌いではない、嫌いにならないというか。

Bは、自分も含めた同世代が流行を生み出す先進的な日本の「今」の姿しか見ていないと述べ、自身も「その時代の人ではないのでわからない」と歴史との間に距離を置いた上で、自身の周囲の人々の影響から「日本のことを嫌いにならない」との見解を述べている。

一方、「政治的統制」は「歴史への関心の希薄さ」が生じる一因ともなっている。対象者Eは、中1で手にした歴史教科書の台湾史に関する記述部分が少なく、1学期終了後すぐに大陸中心の歴史内容へと移ったことに対し、当時「なんで台湾なのに中国の（歴史の）勉強をしなきゃならないのか」と感じ、歴史に対する関心が持てなかったと言及した。また、他の対象者の複数の言及からも、「自分は中国人ではないという意識を持っている」（対象者G）「やっぱり歴史教科書、よくわからなかった」（対象者B）など、歴史教育のあり方が対象者の歴史への関心を喪失させる一員となっていたことが示されている。

ただ、このような政治的統制が「客観的歴史認識」の所持への契機となることもまた否定できない。対象者Fは、歴史教育の中で得た知識と自身の経験による現実の認知について、次のように述べている。

最初はあまり特別な意識はしてなかったです。でも、教育を受けたことによって日本人に対する憤りが高まります。でも、実際に生活する時はやっぱり母親は日本人の友人が多いですから、実際に会って見て、別にそんな悪い人間じゃないとか。昔、旧日本軍はそんなにひどいことをしてくれましたけど、日本人は皆そんなに悪いことを言わない。ちょっと矛盾しているんじゃないかと思ってました。

Fは、歴史に関する知識と自身の母親の友人との直接的な経験との両方を得る中で、日本人イメージの肯定・否定の両側面を「別々に説明して考え」るようになったのだという。

以上のことから、歴史教育によって獲得した知識を自己の日本イメージ形成に直結させるのではない対象者の日本イメージ形成の様相が示される。すなわち、対象者は、教育に関わる政治的統制を十分に認知しながら、過去から現在に至る日本と台湾との関係に目を向け、家族や友人などとの間で共有される日本に対する見方や、自身の直接的な経験に基づき、日本イメージを形成してきたことが明らかである。

#### 4. 総合的考察及び今後の課題

以上、本研究では、台湾の20代および30代を対象とし、家庭環境や日本の大衆文化との接触及び歴史教育の影響が対象者の日本イメージ形成にどのように関連するのかについて質的に検討を行った。本研究の結果、以下のようなことが示唆された。

まず、家庭環境と日本イメージ形成との関連については、家庭内の日本語話者の存在や日本語使用頻度・使用状況に係わらず、家族の成員の日本に対する態度が対象者自身の日本イメージ形成に密接に関わる可能性が示唆された。これまでの研究においても家庭内の日本語話者の存在や日本語使用状況と対象者の日本に対する態度との関連が示唆されていたが（甲斐，1996；篠原，2003など）、本研究において家庭での日本語使用よりむしろ家族の成員の日本に対する態度の重要性が示されたことの意義は大きい。このことはまた、家庭環境において形成された家族共通の日本イメージが次の世代へと継承されていく可能性をも示唆している。

次に、日本の大衆文化と日本イメージ形成との関連については、対象者は幼少時より単独のみならず友人や家族と共に日本の大衆文化との接触を日常的に行ってきたことが明らかとなった。ここでは、日本の大衆文化が日本関連情報の獲得や友人との関係性の形成・維持、また家族間で共有される嗜好・娯楽のための媒介手段として機能し、それによって対象者自身の日本イメージが形成されてきた可能性が示された。既述のように、日本の大衆文化の受容が若者世代の日本イメージに関与することは先行研究でも指摘されてきた。しかし、本研究において日本の大衆文化が対象者と友人・家族等の身近な人々との関係性の中で共有され、それが日本イメージ形成に関与してきたことが見出された点は意義深い。

さらに、日本イメージ形成における歴史教育の影響については、対象者は歴史教育を通して得た知識を自己の日本イメージ形成に直結させるのではなく、家族や友人等との間で共有される日本への見方や自身の直接的な体験に基づき日本イメージを形成している様子が明らかとなった。これは、岩井他（2008）に見られる韓国の場合とは様相を異にする。韓国の場合、学校教育を中心とした歴史教育において、歴史教科書の記述に「侵略者」としての日本（人）イメージが見られ、これが個人の日本人イメージにも色濃く反映される可能性が高い。過去において日本による被統治経験を持つというだけで台湾と韓国とを安易に比較できないが、台湾における日本イメージ形成には台湾特有の状況が関与していることが明白である。そこには、台湾が激動の歴史の中で日本や中国などとの関係から模索し続けてきた「台湾人」としてのアイデンティティ形成の過程までもが透過されるのである。また、1987年の戒厳令解除後、民主化の高まりの中で「台湾という場所に根ざした教育理念を打ち立てる」（山崎，2009）ことを目指し、教育の「本土化」と呼ばれる動きが起こったが<sup>5</sup>、それにより、以後、台湾の歴史教育の内容や教育姿勢自体がこれまでに繰り返し問い直されて現在に至ることが、対象者の史実の受け止め方と多かれ少なかれ関わることも考えられよう。

以上のことから、本研究では、台湾において対象者と家族、友人等の身近な人々との関係性の中で日本イメージが形成されてきたことが示されたと言えよう。ただ、本研究は日本に滞在する台湾出身者を対象としており、対象者9名の小規模の研究である。そのため、この研究結果を過度に一般化しようとするものではない。だが、本研究から得られたことは、今後、台湾における日本イメージ形成の解明の上でも、また異文化間における相互理解の上でも有効であると考えられる。

その一方で、本研究では新たな課題もまた明らかとなった。それは、インタビューの中で、来日前からの肯定的な日本イメージが来日後否定的なものへと変化したという複数の対象者の言及が見られたことである。すなわち、来日前は日本や日本人に対し「礼儀正しい」「規則を遵守する」等のイメージを所持していたものの、来日後の日本人との接触体験の中で「日本人は冷たい」「差別的である」などと強く感じ、日本イメージが大きく低下したというものである。李（2006）は台湾の若い世代がドラマを通して描く「虚像」としての日本への好イメージと実際に自身が体験する日本との間でギャップが生じる可能性を指摘しているが、本研究においてまさに同様の事態が示されたと言える。

このことは、対象者の日本での滞在生活や周囲との関係形成を困難にさせるだけでなく、留学生活自体が維持できなくなる等の不適応にも繋がる可能性がある。それゆえ、肯定的な日本イメージをもって来日し、急激なイメージ低下を経験する台湾出身者に対し、来日後、いかなる教育支援が必要であるのかを今後検討していく必要がある。例えば、各自が自身の直接的な体験に基づいて日本社会への理解を深め、それによって自己の日本イメージを修正していくことで適応が可能となるよう、継続的な支援を行うことが求められるであろう。

以上のような点も考慮しつつ、今後も台湾における日本イメージに関わる検討を重ねるとともに、詳細な分析を行うことで、更なるケースについても明らかにしていきたい。また、ある家庭環境における世代別の日本イメージ形成とその要因や継承性についての検討も今後の課題としたい。これらを通して、異文化間の相互理解や教育支援にこれらの成果をいかに活用できるのかについても引き続き検討を重ねていく所存である。

## 注

1. 「家庭内」および「家族」の概念は、社会及び個人によっても多様であると推測され、執筆者間でもその認識に多様性が認められた。そのため、本研究では、対象者自身が家族と認める範囲及びその構成員を指すものとして扱う。
2. 本稿で述べる対象者のコメントは、すべてデータのままとした。ただし、文脈理解等のために事例に付した括弧内の記述は全て筆者による要約・補足である。
3. 表2では、これを(\*)の記号で示した(例 有(\*) )。
4. 「日本の大衆文化」は、ドラマや映画などのメディア・コンテンツのみならず、日本製品の選択的使用や日本への観光を目的とした旅行等も含めた広範な日本関連の選択的行動を指す概念であると考えられることができる。そのため、本研究では、日本の大衆文化の指す範囲を厳密に限定するのではなく、対象者がその言及の中で「大衆文化」またはその一部と認めたものについてはこれに従うこととした。
5. 教育の「本土化」については、山崎(2009)や林(2009)などに詳しいが、例えば教育内容が台湾の生活環境や歴史経験に基づくものに改革されるだけでなく、多元的・重層的な台湾アイデンティティの養成などが掲げられ、教育に盛り込まれた。

## 参考文献

- 岩井朝乃・朴志仙・加賀美常美代・守谷智美(2008)「韓国『国史』教科書の日本像と韓国人学生の日本イメージ」『言語文化と日本語教育』第35号, お茶の水女子大学日本語文化学会, pp10-19.
- 岩淵功一(2001)『トランスナショナル・ジャパン アジアをつなぐポピュラー文化』岩波書店, 東京.
- 甲斐ますみ(1996)「言語的背景、及び社会的環境から見た台湾人青年層の中の日本語」『岡山大学留学生センター紀要』4, pp21-42.
- 加賀美常美代・守谷智美・楊孟勳・堀切友紀子(2009)「台湾の小学生・中学生・高校生・大学生の日本イメージ形成—9分割統合絵画法による分析」『台湾日本語文学報』第26号, pp258-308.
- 川喜田二郎(1967)『発想法 創造性開発のために』中公新書, 東京.
- 蔡錦堂(2006)「日本統治時代と国民党統治時代に跨って生きた台湾人の日本観」五十嵐真子・三尾裕子編著(2006)『戦後台湾における〈日本〉』風響社, 東京, pp19-60.
- 財団法人交流協会(2007)『台湾日本語教育事情調査報告書』[http://www.koryu.or.jp/nihongo/ez3\\_graphics.nsf/0/e12cc2573466d40e4925736f0032f3d3/\\$FILE/report\\_2006.pdf](http://www.koryu.or.jp/nihongo/ez3_graphics.nsf/0/e12cc2573466d40e4925736f0032f3d3/$FILE/report_2006.pdf), 2010年6月18日閲覧.
- 財団法人交流協会(2010)『台湾における対日世論調査』[http://www.koryu.or.jp/taipei/ez3\\_contents.nsf/04/52F6843250D2FB0E492576EF00256445/\\$FILE/detail-japanese.pdf](http://www.koryu.or.jp/taipei/ez3_contents.nsf/04/52F6843250D2FB0E492576EF00256445/$FILE/detail-japanese.pdf), 2010年6月18日閲覧.
- 篠原信行(2003)「台湾の大学生の日本と日本語に関する意識とそのイメージ形成に影響を与える要因に

- ついて」『日本語文芸研究』第4号, pp117-137, 台湾日本語言文藝研究会.  
台北駐日経済文化代表処 (2009)『台湾に関する意識調査—調査結果報告書』<http://www.taiwanembassy.org/public/Data/95819392271.pdf>, 2010年6月18日閲覧.  
日本学生支援機構 (2009)「平成21年度外国人留学生在籍状況調査結果」[http://www.jasso.go.jp/statistics/intl\\_student/data09.html](http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data09.html), 2010年6月18日閲覧.  
守谷智美・楊孟勳・加賀美常美代 (2009)「台湾における日本イメージ形成の背景要因 —『日本語』の位置づけに着目して—」『お茶の水女子大学人文科学研究』第5巻, pp139-151.  
山崎直也 (2009)『戦後台湾教育とナショナル・アイデンティティ』東信堂, 東京.  
李衣雲 (2006)「台湾における日本恋愛ドラマと日本イメージの関係について」『マス・コミュニケーション研究』6, pp108-206.  
林初梅 (2009)『「郷土」としての台湾—郷土教育の展開にみるアイデンティティの変容』東信堂, 東京.

#### 付記

本調査のご協力を賜りました皆様に、心より御礼を申し上げます。

本研究は、2006年度～2009年度お茶の水女子大学特別教育研究事業「コミュニケーション・システムの開発によるリスク社会への対応」における異文化間コミュニケーション・プロジェクト「対日イメージの規定要因とコミュニケーションのあり方に関する研究」（研究代表者：加賀美常美代）の研究成果の一部である。